

## 病理組織検査技術の習得及び知識を深める取り組み

病理技術を安全かつ確実に継承できるように

◎坂根 潤一<sup>1)</sup>、井上 卓<sup>1)</sup>、鈴木 勝己<sup>1)</sup>  
地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立こども病院<sup>1)</sup>

### 【はじめに】

我々は、第67回日本医学検査学会にて『病理組織検査における実習生教育法の提案』、本年5月の第68回日本医学検査学会では『筋生検における検体凍結教育法』として食用肉を用いた病理検査技術の新しい教育方法を報告した。本法は、安全かつ確実な技術習得・継承が可能である。貴重な患者検体を使用することなく、食用肉を用いることで繰り返し作業が可能であり、教育や復習にも非常に有用である。

本報告では、これまでの実体験とともに本法を用いた期待される効果を報告したい。

### 【目的】

安全かつ確実に病理検査技術が習得でき、継承することを目的とした。

### 【方法】

食用肉は、スーパーマーケット等で入手可能な鶏肉(肝臓・心臓・もも)を用いた。新鮮生材料を切り出しから写真撮影、ホルマリン固定、薄切、染色(HE染色及び特殊染色)までの一連の病理検査工程を行った。さらに、特殊染色、免疫組織化学的染色、凍結切片作製、筋生検検体処理及び各種染色を行った。

### 【結果】

実体験として、検体紛失や病原体感染の危険性などの安全面での配慮が大幅に軽減された。体験者(臨地実習生や新しい技術を学ぶ職員)の評価は、病理組織検査の全体像・仕事内容が理解し易い。パラフィンブロックの包埋や薄切、染色等に起こりうるアーチファクト

についても理解が深まったと技術面での工夫を考える機会も得られた。鶏の肝臓を用いた特殊染色(マッソントリクローム染色、EVG染色、鍍銀染色)では、患者検体類似の結果が観察可能であり、染色液調整等の精度管理にも使用可能と考えられた。また、鶏の心臓を用いた免疫組織化学的染色では一部の免疫染色に使用抗体の特異的な陽性所見が得られ、コントロール標本としての可能性も示唆された。特殊な凍結技術を必要とする筋生検の凍結処理工程では鶏もも肉を使用し、切り出しから凍結標本作成、各種染色に至るまですべての工程が体験可能であった。さらには、故意にアーチファクト標本を作製するなど、凍結技術の違いで診断に大きな影響を及ぼす事を現実的に体験可能であった。

### 【結論】

本法は、一から病理標本作製工程を学べるため、病理組織検査の一連の流れを理解し易く、技術面と知識面の再確認として有効と考える。また、故意のアーチファクトや試作をする上で有効に活用でき、正しい技術や知識を安心確実に学べる事が可能であった。本法は、病理組織検査技術の習得及び知識を深め、技術継承を行う上で有効な方法として使用できる。

連絡先：054-247-6251(内線 2325)